

水上勉著<一休>を読んだ、少し前に「一休さんとは・・どんな人だったのかな」という興味から、一休さんの本を2、3点読んだことがあるが、たいして頭に刻まれることもなかった。一休さんは若いころに猛勉強をした、中年には同僚の僧を、「地位と名誉と金を欲しがる売僧」と呼び、「お前たちに 禪が 説けるか」なんて偉そうなことをうそぶいている。最晩年の八十歳前後には三十歳ぐらいの盲目の歌姫、森女（しんじょ-森侍女-しんじじょ）と暮らし性の話を赤裸々に残している。幼少のころに聞いた、頓智の一休さんの話は出てこない。

一休さん、どうもよくわからない、次の機会に同じ書棚に並んだ漫画本も借りた。絵の描ける漫画家、肉体の絡み、男同士にしろ、男女にしろ、なかなかリアルに上手く描いている。他の部分、寺がある、経を読む、僧が山を歩く、荘厳なお堂がある、一休さんが師や同輩と話しているところも描いてある。川や海の風景は水墨ふうにゆったり、幽玄世界の画面になっている。これではちとわからない、漫画では食い足りない、またもとの本に戻った。

昼夜清宴 多盃に爛酔す	昼夜宴を催し、酔っている
女色勇巴（ゆうは-男色） 馬腹驢腮	男色・女色三昧。馬やロバに生まれ変わり、娑婆に帰ろうぞ。
児孫の純老 大笑すること咄々	一休こそ、大燈国師の五代目だ。

昨日は俗人、今日は僧、生涯の胡乱、是が吾が能	昨日までは俗人で、今日は僧。一生いいかげんに 生きる、これがわしのできること。
------------------------	--

諸悪作莫：しょあくさくま<悪をなすな>	唐代、白居易が禅僧に問うと、こんなことは三歳の
衆善奉行：しゅうぜん<よいことたてまつれ>	子ども知っているが、八十歳の老人には、実行が難しい。

一休は自らを「瞎驢-目の見えぬロバ-差別用語であり、罵り言葉である」と称した。弟子や同輩からも、瞎驢和尚とか、瞎驢師と呼ばれていた。臨済宗の開祖の「臨済録」にある。「私の正法眼蔵がこのカツロの所で滅するとは、だれが知るであろう」といい終わり、入滅した。この話はここまで、以降は、オレには難解である。

一休は風狂と評される。禅宗史においてしばしば風狂人物が現れる。良寛さんもそうだねえ、寺で説教なんかできないと、乞食になった人、船頭になった人、いろいろいるらしい。

森女：「一休和尚年譜」では一切触れられていないが、「狂雲集」に14編の漢詩が載る。

「盲女の森侍女、情愛はなはだ厚し。将に食を絶って命をそんぜんとす。愁苦のあまり、偈を作ってこれをいう」

「美人の陰に水仙花の香りあり」

「おもひねの うきねの とこの うきしつむ なみたならては なくさみもなし」

「木は凋み葉落ちて更に春を回す、緑を長じ花を生じ旧約新たなり。森也（女陰の事）が深恩もし忘却せば、無量億劫畜生の身」 一休は老残の身が若返ったので、盲女の陰に感謝している。一休 77～85 歳。

京の動乱の様子 「和尚みなみのいほりにいたまいけるに、にし八でうあたりの土倉をやくとて土民のたむろし、二町ばかりなるみなみ東寺の山門は土民に打ち取られ、坊主どものづんなんかつしきを集めて酒、豆、握り飯など一揆にふるまいてありと聞かされて申さるるに、あさましきものは、北はしょうこくのかつしきども、御所の上臈と不義致し打ち首となりしに、南は東寺のかつしきども一揆の手助けすなり、都の僧の棲むところなきや。八月に入りて、この一揆は、畠山殿のさしがねと聞き及べり。すなわちかの地にありし持国殿の意趣により、馬借、土民駆り立てての入京なりと。土倉、酒蔵、米、みそ、雑穀を盗む。・・・。

久しぶりに、IC レコーダーをもって河原に来ている。「久しぶり」というのは、河原の草が萌えだしたころ、萌えるといっても、まだやっと梅が咲き始め、まだまだ極寒のさなか、それでも植物の不思議さなのか、その季節になると芽が膨らみ、ひよろひよろ草が出始める、そんなころに、この IC レコーダーをもって、ぶつくさつぶやきながら歩いていた。夏至が過ぎて半月ぐらいなのか、日々の陽の暮れが少しずつ早くなっている。

これを書きながら思い出したが、梅の咲くそのころはまだ歩けなかった、「膝がいてて」ゆっくり 1 キロも歩くと限界だった。そのころは自転車で河原の草の上を走っていた、草の上は抵抗が大きくしんどい、太ももに負担がかかる、膝がだめ、歩く、走るのが駄目なら、せめて力を入れて自転車を走らせ運動をしなくてはとさかんに自転車のペダルを踏んでいた。速足で歩けるようになったのが 3 月からだと記憶する、毎日 5 キロぐらいを歩いた、5 キロ歩くとヒザがだるく、「無理をしてはいけないねえ」と過ごしていた。今もまだ正座はできない、“蹲踞の姿勢” いわゆる骨の先生がいうところの、“ウンコスタイル” がまだできない。それと最初からだと思われるが、ヒザにばかり考えがいついたが、当初から今も股関節がおかしい、左のヒザと、左の股関節が関連しているんだろうと思うが、おかしい、こっている。このように身体のことばかりを言っているのはよくないねえ、老人だねえ。若いころは、身体は動くのがあたりまえ、あるのがあたりまえ、苦情も、痛みも、違和感も、なにもなかったものだねえ。

今、朝の 10 時、「なんで今頃」いつもは午後、この太陽がきつい季節、日照りで暑い季節は、毎日夕方の 4 時 5 時ころに河原にきている。ところが今日は台風 3 号の天気予報で、午後から雨、夕方 6 時ころには近畿の太平洋側を通過し、北上するとの予報。台風予報はいつも「外れるものだ」とたかをくくっているのだが、今回の台風は速度が速い、高速車並みという、早い台風なら天気予報も当たるかもしれない、たまには天気予報のいうことも聞かねばと午前中の今の時間に河原に来ている。まんざら天気予報が違ってないのか、日照りはない、多少の風はある、生暖かいので、快適ではないが不快でもない。予報通り、午後はきつく雨が降り出し、夜には元に戻った。

春に比べると、体力も回復してきた、7 キロ 8 キロ走っている。走るといっても歩くよりは少し早いぐらいの、“オジン走り” 情けないけれどもこれ以上は望めない。走る、という定義は、一瞬たりとも体が宙に浮いている、浮いているぶん歩くのとは違うのだという。オレの場合、歩くと走る、自分では走っていると思っているが、足は宙には浮いていない、前脚、後脚、ともに台地を踏んでいるのでは・・・もっとラストスパートの頃になると、多少は宙に浮いているなど感じるのだが、これも錯覚だろうか。最近、娘から万歩計をもらった。「今どき万歩計 そんなの そんな機能 スマホについてるよ」と下の娘から揶揄されたが、色々な事柄を設定して機嫌よくぶら下げている。それで先日計測するに、オレの場合、歩くと走るの歩幅、歩く方が大きいのに驚いた。歩きでは 873 ミリ、走りでは 770 ミリだ。この違いが何なのかはまだ調べていない。

河原の草は、植木屋が入って年 2 回草刈りをする。6 月の中旬、まだ草がひざぐらいの高さにしか育っていない頃にまず一回目があつた。それから半月経って、草はまたひざぐらいまで伸びてきている。これから真夏の季節、草は勢いを得てぐんぐん伸びる、もう一月もすれば背の高さまで伸び、緑の青さも濃く、草の葉も硬くなっていく、草ぼうぼう、緑の大繁殖となる。2 回目の草刈りは 10 月になってからだ。

昨日は、栄子さんと、“平野さんの服の展示会”を見に行った。三十歳ぐらいからの知り合いで、和風の着物生地を洋風に仕立て直して作られている。藍染もあれば、着物柄もある、今回はインドネシアの布もある、83 歳になられたそうだ。40 年間の知り合い、なかなか楽しいものである。帰り、栄子さんが、「いい コーヒーやがある 珈蔵」と連れて行ってくれた。コーヒーとパンの店、午後 3 時だという時間なのに千客万来、コーヒーは、オレの入れるものとそうは違わないと自賛、サンドイッチは旨い、みなさんこういう店で、時間を過ごしておられる、ごちそうさま。

「海水浴 同道するでしょう」と連絡が入り、「いきますよ」と返事をしていた。これが山なら、一も二もなく喜んで、「あれをしよう あれを持っていこう」と準備をするが、海は苦手である。泳げない、泳ぎたくない、なにをしていけばよいのやら、と思案しつつ、なにも用意することもなくやってきた。日本海の竹野浜海岸、故吉谷君がボンベを背負って潜っていたところかな、そういえば何度か来たことがあったかな、興味が無いのと、記憶が飛んでいるのとで、夢の中の話である。砂浜で我が娘たちはおおいに喜んで遊んでいた、浮き輪につかまり浮いていた。砂浜にはたくさんの人、大人も子供も、キャッキヤ喜び、走り、舞い、水に浸かっている。

旅館の晩飯が6時からということで、散歩に出た。漁港がある、川が流れている、黒瓦の家々が並んでいる。川の名前は竹野川、ここは竹野浜海岸。兵庫県豊岡市竹野町が正式な住所だ。海まじかの川は、川なのか海なのか、満々と水をたたえて静かに流れていない、来るときに見た円山川も同じように満々と水があった。1メートルも水位が上がれば地面が浸かってしまうのではと心配するが、このあたりの家々や路は街は、海とひっついている。

一カ月も前から、「何で行く」と話し合っていた。子供は車が苦手、長時間後部座席に座ってられない、という理由から、車と電車の二本立てになった。「JR 城崎温泉駅で 11:50 に会いましょう」ということになった。中国自動車道は混みそうなので、大山崎 JCT から天橋立方面に向かった。これは正解だった、車の方が1時間も待つことになったが、帰路は中国自動車道を選んでしまった。子供を千里で降ろさねば、大山崎なら遠回りになるので、という理由から中国道を選んでしまったが、これを記しながら、中国道の渋滞を甘く見てしまった反省に、いまだに悔やんでいるとは少し大げさかと思いつつ、京都縦貫道で帰るべきだった。

先ほどの夕方の散歩の折、資料館というのを見つけたが、時間も時間なのでぼんやり建物を眺めていると人が出てきてくれた。向かいの銀行のOBだとおっしゃる方が、資料館の守りをしておられる。「教えてください 先ほど北前という言葉がありましたが」「この地は 猫崎半島という 突き出た高い壁があります その壁のおかげで 時化の時に 船がその東側に避難した 北前船や漁船が寄港した そういところで 竹野は」竹野は、新潟や富山の豪邸に比べるとその立派さは劣るが、ピカピカの黒瓦の切妻屋根、壁は白木の板を横に張ってある、そんな住宅がずらり並んで建っている。川を挟んで“弁天浜”となっている、街が違うのか同じなのかわからないが、竹野浜も弁天浜も家々はみんな旅館か民宿を営み、夏は海水浴、冬はカニを食う街というようになっているらしい。

旅館の朝は、6時に起きて辺りをふらふら。漁港の建物がある。魚があがった、鮮魚がはねた、という名残がない、不思議だ。ほとんどが漁民の村、昨夜浜で花火をする子供たちを見ながら沖ではいくつかの漁火があった。漁火はそう遠くない地点で光っていた。そんな漁船がいつ出て行って、いつ帰って、どこに魚をおろしたか、魚のにおいもない。川を挟んで家々が立ち並んでいる、千軒ぐらいの家があるかもしれないが、橋がない時代にはそれぞれの村の交流はどうなっていたのか、昨日の資料館の人がいれば聞いてみたいものだ。海のほうには猫崎という小山が突出し、うしろの中国地方の山々は、ポコリポコリずっと向こうまで山が連なっている。

漁船が並んでいる、下の水は緑色に濃い、小魚は見えない、ウキが見える、船は白い、兵庫県と書いてある、〇〇丸と書いてある、船はなぜ、丸なんだろうね。30センチ40センチの大きな電球を10個20個ぶら下げている。あの電球を全部点し、高速で沖まで船を走らせれば、ガソリン代が相当高くつくだろうね。ツバメ、カモメ、トンビが舞っている、カラスもいるが影が薄い。

昨日は夕方近くになって少しだけ水に入った。水着は持ってこなかったが、半ズボン、Tシャツ姿で入ってみた。水が冷たくない、足が立つところまで歩いて行った。「テトラポットの付近は 足が 立つよ」といつてくれるが、そこまでの50メートルほどは少々深いらしい、とても足の立たないところに行く気はしない、気弱なおっさんである。

一日目に、「ちょっと散歩」とみなさんを置いて浜の端までやってきた。「灯台まで1時間」と聞き、スリッパではとあきらめたが、二日目再度挑戦だ。「危険箇所あり」の看板があったが、どんどん歩いた。海に突き出た半島は、歩けば1時間もかかるという、川の砂が堆積してできあがったというが、100メートルも積もるかねえ、と眉に唾を付けながらも、堆積した岩は、砂をそのまま固めたような砂岩、しかもその模様が波であり小石である。さきっぽの灯台では日本海が丸見え、ロシアも朝鮮半島も見えはしないが、ずっと海である、船が5,6艘浮かんでいる。

有岡利幸著<里山>先日、友人女性が、「私は 山田村で育ったの 春日丘高校の同級生としゃべっていて 当時茨木は 都会だったんだって」とおっしゃる。距離で 5 キロぐらい離れている地域だけれど、道路も車もほとんどない時代、たった 5 キロの距離が、田舎度の違いかもしれない。思い起こせば、茨木といえども、大阪市内は都会だったのに比べ、ほとんどが田んぼの街、茨木も田舎だった。明治以降、鉄道や道路が整備されたが、吹田、茨木、高槻が開けだすのは大阪万博以降だ。古代、近代、淀川は物流の大動脈、淀川沿いの地域は華やかにひらけていたらしい。今のよう鉄道、道路による物流が中心になったのはたかだか、50 年 100 年、それまでは淀川が中心だったのだ。今でこそ山田村も都会だが、それも万博以降、それまでは小高い山里、里山の村だったのかもしれない。

この本、読むのに時間がかかってしまった。最近、オレが興味を持っていることがずらり並んでいる。本の後半は明治以降の話になっているので今回はパスということにした。里山という本だけれど、目次には、縄文時代、万葉集の時代、奈良の三輪山、春日山、続いて、製塩、製鉄と続いている。里山の本だと読みだしたが、里山、樹々、歌、次々面白い方向に本の内容が続いていく。

先生いわく、里山という言葉は、1700 年代の古文書に出ているそう。里山に対する言葉は、奥山だそう。オレの生家はサラリーマン家庭で農家ではない。子ども時代は平地の田んぼだらけの鳥飼村で育った。そこは淀川のそば、古代には海がすぐそばまで来ていたか、まだ海の底だったか、暮らしていた当時はそんなことは思いもしなかったが、最近古代の地図、地形を見るに、大阪のほとんどが海か中州か湿地だったようだ。鳥飼村は水田だらけ、水田の間を水路が発達し、色々な物の運搬は川船を竿で漕いで運んでいた。農作物も、牛も、肥えも川船で運んでいたように記憶している。当然近くに山はなかった、遠くに北摂の山、生駒の山が見渡せたが、住まいの近所は平野部でそばに淀川があった。オレ自身、山の麓、山のすそ野という環境は暮らしたことが無いので、里山は実感できない。

◎村里や集落に近い山を指して里山という。森と林の違いは、林はほとんど同じ樹種で構成され、林業用語で単層林というのに比べ、森は字の如く林の上にもう一つ樹冠をもつ樹木が生育している集団植生である、林業用語で複層林という。

◎縄文時代から人は里山を作りだした。花粉分析を中心とした植物遺体を分析し、当時の自然環境・植生を復元した。三内丸山遺跡の背後には、八甲田山に続く落葉広葉樹の森林が広がっていた。集落ができる以前は、このあたり一帯はブナ林を中心とした落葉広葉樹林だった。ところが森林から草原へと大きく変化したのは、火をつけるなどの人為的な動きがあったという。人が住みはじめると森林は減少し土地の乾燥が進んだ。草刈りや火入れなどの手入れをしないと山菜や木の実のは採れなかった。人は栗も漆も植えた。縄文人の食料のほとんどが、植物性食料だったことが人骨の分析から検証された。春にはワラビ・ゼンマイ、秋には木の実とキノコ、海の幸サケ・ブリ、山の幸シカ・イノシシなどを食べていた。三内丸山では 1500 年もの間、巨大集落であった。巨大とは数字を調べなくては。

◎原生林：厳密な意味で人間が全く入っていないか、その影響がほとんど見られない森林。わが国ではほとんど、残っていない。原生林にはシカ・イノシシ・ウサギなどが少ない。そのてん再生した森林にはシカ・イノシシ・ウサギの食料となる草木類・新芽が多く、獣が繁殖し、畑・水田の被害も多い。今、日本で原生林といわれているものは、伐採後、鳥や風で運ばれた種によって生育したもの、伐採された切り株から芽が出たもの、植物社会の再生力によって復活した森林である。

◎東日本は落葉広葉樹林<クルミ・クリ・トチ>などの木の実、サケ・マスなどの大型魚類が豊富なのに比べ、西日本の照葉樹林では縄文人が生きていく食料が十分に確保できなかった。そのことが次の農耕文化を築き上げていった。

<照葉樹：冬でも落葉しないシイ・カシ・タブ 落葉照葉樹：ブナ・ミズナラ・ナラ>

◎古代の水田は、谷間あるいは扇状地の上流部から造成された。平野の方が開拓しやすいと思われるが、平野の場合河川から水を引いてくる技術が必要だった。鉄製の農機具のない時代、石製・木製では無理だった。水田の発達、すなわち里山の発達史だった。

◎<日本書紀：「うけもち神」の死とともに、頭に牛馬、額に粟、眉に繭、眼に稗、腹に稲、陰部に麦・大豆が生えてきた。天照大神は人が生きていくのに必要な食物だといわれ、それぞれ畑・水田に植えられた>

◎あしひきの 山田作子 秀でずとも (縄) しめだにはえよ 守ると知るがね

◎佐保川の 水をせきあげ て植えし田を 刈る早飯は ひとりなるべし

◎新墾田(あらきだ)の 鹿猪田(ししだ)の稲を 倉につみて あなひねひねし わが恋ふらくは

◎森林の高木は、建築材に、中木は燃料に、低木は刈敷(かりしき)という名で肥料に利用された。

◎刈敷：草や葉を田の中に入れ、腐らせたり、燃やした灰を田畑にまいた。

◎風土記：古風土記と呼ばれるものは、奈良時代の官選の地誌。1) 地名を漢字二字で表記。2) 産物。3) 土地の肥沃。4) 山川原野の名の由来。5) 伝承している旧聞異事。出雲：ほぼ完本、播磨、肥前、常陸、豊後が残っている。

◎常陸国風土記：それ筑波岳は、高く雲に秀で、頂は西の峰さかしく高く、雄の神と書いて、登らしめず。ただ、東の峰は四方いわおにして、上り下りは陰しくそばだてるも、その側に泉流れて冬も夏も絶えず。坂より東の諸国の男女、春の花開くとき、秋の葉のモミずるおり、あい携ひつらなり、飲食を持ち来て、馬にも徒歩にも登りて、たのしみ、遊ぶ。

◎大和の国風土記：むかし明日香の地に老狼がありて、おほくの人を食らふ。土地のひと畏れて、大口の神といふ。我が国における食物連鎖の頂点にいたオオカミについて、各風土記に載っている。

◎「山見れば 山も見が欲し 里見れば 里も住みよし」里から近くの、春日山・高円山・平城山。春日以外の山は里人が山に入り、人々の生活を支えてきた。

◎大伴坂上朗女：神を祭る歌「ひさかたの 天の原より あれ来たる 神のみこと 奥山の サカキの枝に 白香つけ ゆふ(木綿)とりつけて いはいべを(祭祀道具) いはいまりすえ 竹玉を しじに貫き垂れ 猪肉じもの ひざ折り伏せて たわやめの おすひ取りかけ かくだにも 吾はこひなむ 君に逢うはじかも」先祖神を祭る歌。

◎「奥山の 岩本菅(いわもとすが)を根深めて 結びしこころ 忘れかねつも」

笠女郎(かさのいらつめ)が大伴家持に送った歌 こんなに深く想っているのに・・・。

◎蜻蛉とは昆虫のトンボのことである。トンボは肉食昆虫で稲に害を与える虫類を、幼虫時にも成虫になっても食べてくれる。稲作農家にとって、役に立つ益虫ということができる。

◎三輪山は大和政権に国譲りの後、出雲へ去った大物主神が祀られている。大神神社と書いて(おおみわ神社)と読む。以前、ナビで、この読みがわからず、難義した。山の西側は山辺群であり、南北に山辺の道が通る。

◎春日山と三輪山の違い：宮都の東にある神山として相似ている。ふたつの山に祀られた神の祭りも朝廷がとりおこなう官祭とされてきた。春日山は特別天然記念物指定地となり、三輪山は二次林のアカマツや人工植栽の杉林がほとんどである。春日山は里人の利用を排除してきたが、三輪山は里人が利用してきた。平安時代以降「春日神社山内の狩猟伐木を禁ズ」と太政官符が出されている。シカは神鹿として特に保護された。

◎熊沢藩山：江戸時代初期の儒学者：「今山林つき河沢埋もれたるは五行かけ、五臓破れたたるがごとし」「近年五六十年このかた天下の兵乱なく、静かな時運にありて、文武の教えなければ、国郡の主も人に足るの道を知らず、栄華のおごりを事とせり。そのうえ仏者の奢りはきはめ、無道至極して山林を伐りあらしたれば、郡国の浅き山は忽ちつき」

◎しかし蕃山の心配をよそに、我が国の気候風土は植物の気候風土に適しているため、石炭までのこの時代の200年、薪生産は各地に拡散しながらそれぞれの地で、百姓たちの稼ぎ代となり、山林は酷使されながらも、地域の人たちと一体となって、山は繁栄の時期でもあった。

◎製塩の話：岩塩を産出しないわが国では塩は海水から採る方法しかなかった。「古事記」廃船の木材を燃やして海水を煮詰め、塩を作ったことが述べられている。「万葉集」志賀(しか)の海女の 塩焼くけぶり 風をいたみ 立ちは上らず 山にたなびく」「来ぬ人を まつほの浦の 夕風に 焼くや藻塩の 身もこがれつつ」

◎近世瀬戸内十州が競って塩浜を整備<播磨・備前・備中・備後・安芸・周防・長門・阿波・讃岐・伊予>塩田が多く、花崗岩の砂地、寡雨、高温、低湿、晴天の日が多く、波が穏やかで潮の干満差が大きい自然条件があげられる。

◎古代の製塩：乾燥した海藻の表面の塩分を洗い出し、濃い海水を火で焚いて濃縮した。

◎鹹水(かん)：製塩過程で濃縮した食塩濃度の高い水。

◎製塩には、天日採塩と、煎熬採塩（せんごう-煮詰める）があるが、大量の塩を得るためには煮詰めなければいけなかった。燃料としての多くの薪が必要だった。松の幹・枝・葉がこのんで燃やされた。

◎近代製塩に “揚浜式” と “入浜式” がある。揚浜式は塩田に人力で海水を撒いていたが、入浜式は潮の干満を利用して塩田に海水を満たした。

◎製鉄：いよいよ製鉄の話、以前から「誰が 何処で どのようにして」と知りたかった、いくつかの話なり本なりで知ったが、わからないことが多かった。明治 34 年、官営八幡製鉄所の高炉から大量の鉄が生産されるまでの日本の製鉄事情が書いてある。若いころ、新幹線に乗って何度も広島方面に行ったが、「中国地方の山は 他の地域と 山の状態が違うねえ」と思っていた。他の地域の山は植林にせよ自然林にしろ、もっと樹々が大きく生い茂っている、もっと緑々しているのに比べ、中国地方の山々の樹々は何となく弱々しく、高さも低い。「なぜだろう」と思っていたが、製塩や製鉄の燃料として大いに利用され過ぎたからなのか、そうでないのか、この本では、新幹線から見える山々の事情の答えは出てこなかったが、知っている方がおられたら教えてください。

◎江戸時代、中国山地を領国とする国々で “たたら製鉄” がおこなわれていた。中国山地で長期にわたって製鉄がされていた理由は、良質の砂鉄が大量に産出したこと、砂鉄を溶解還元するための木炭の大量生産の可能な山地が広がっていたことが最大の理由である。＜播磨・但馬・美作・因幡・伯耆・備中・備後・出雲・石見・安芸の 10 か国＞

◎たたら製鉄の立地条件。1) いち地域になるべく長期に、大量の砂鉄・木炭が入手できること。2) 寒冷地で、冬場、労働力が利用できる（農閑期の百姓の労働力）。3) 砂鉄採取が米作灌漑を妨げず、伐採により獣害、冷水害が除かれる（獣害・冷水害とは、わからない）。4) 一年に 40 回も炉を作る、製炉用粘土の入手ができる。

◎たたら製法による鉄の作り方。1) 「鉄穴（かな）流し」と呼ばれる砂鉄の採取。2) 燃料用木炭の生産。3) たたら炉による砂鉄の熔鋼。4) 大鍛冶による鍛鉄（この二つの言葉、大鍛冶は鉄の生産者。小鍛冶は刀工。包丁、農具等は野鍛冶とある。鍛鉄・鍛鉄・専門すぎてわからない）これ以外に、砂鉄、木炭、製品の運搬業。作業員に対する生活物資の供給。たたら炉を作る粘土採取、と膨大な事業となった。

◎たたら製鉄の「けら押し」とは。一代（ひとよ）の作業では。砂鉄と木炭が 4000 貫必要。砂鉄と木炭を 30 分ごとに交互に炉にいれ、これを三昼夜焚き続けたあと、炉を壊し、「けら」と「銑」が得られる。このサイクルを一代という。この作業を年間 40 回ぐらいおこなわれた。

◎砂鉄は風化した花崗岩のボロボロのものが原石である。砂鉄を採取する方法が鉄穴（かな）流しである。花崗岩の風化細石でできた真砂（まさ）の山土を掘り、谷側に流し沈殿した砂鉄の混じった砂を取り、この砂を何度も洗い選別して砂鉄を採取する。

◎鉄穴（かな）流しは農閑期に行われる。鉄穴師は山に鍬を打ち込み土砂を採取し、溜池に投げ入れる。池を決壊させて土砂と砂鉄を分離していく。土砂は下流に流れどんどん堆積する。堆積でできた平野部を水田にした。

◎たたら場では大きなふいごで風を送り込み、赤熱した砂鉄を溶解させていく。ふいごを踏む者を「番子」といい、重労働なので「かわりばんこ」という語が発生した。また番子がふいごを踏むという語が、歌舞伎の所作の「たたらを踏む」という語になった。一代というサイクルで 2~3 トンの鉄が生産された。

◎たたら炉は年間 40 回操業した。木炭用樹木は 1 年間に鉄山 40 町歩が必要だった。炭の原木伐採年数は 20 年とすれば、800 町歩の鉄山が必要だった。（この広さの単位がわからない、実感できない）

◎木炭はほとんど炭素ばかりの固形物。大量生産方法として世界的にも「伏焼」がおこなわれていた。地面を掘るか、周囲に土を積み上げ、中で火を焚き、原木を積み重ね、土をかけて蒸し焼きにする。

◎わからなかったことが少しは解決できた。地面にある土や石や岩、これが火力によって、陶器や磁器やガラスに、鉄も鉄以外の金属にもなる、この不思議が少しはわかった。土や石を見て「これだ」という眼力、これらの中からモノを取り出す技術、モノを加工する技術、すごい技術だね、今は何とも思わないが。右を見ても左を見ても、モノに囲まれている、モノが在るのがあたりまえ、こういう生活、こういう状態、少しは考え反省しないといけませんねえ。

久しぶりに、橋本君のヨットに載せてもらってセーリング、たかだか2時間ぐらい、出発して4キロある突堤を一回り。それでも突堤の外側は波が高い、風がきつい、帆は風を受けてぐいぐい進む。今も古代も、人は船に帆を張って、大航海をしていた。日本列島に歩いてきた奴らも居たが、船で来た奴らも多かったはず。この大阪湾の濁った海、先日のロシアまで見えそうな日本海、オレには、海はわからない分、その姿は神秘だ。人類にとって、海との関わりは切っても切れない、なんて、妙に感慨にふけりながら、冷えた缶ビールをいただいていた。

堤隆著<旧石器時代>世界の石器時代と日本の石器時代が違う、と先生。マンモスなど絶滅獣と人類が共存していた時代、氷河期に当たる時代、磨製石器を用いず打製石器のみを利用した時代、土器が発明されていなかった時代、といくつかの定義を持ち出すも、日本の旧石器時代にはピッタリとあてはまらない、4万年前以前と以降との違いと話されるが、これもちょっと。石ころの形を見比べてみても理解できない、違いが判らない、石器時代の話は今一つだと思っていたら、面白い話が出てきた。

◎野尻湖で13000点を超すおびただしい動物化石が見つかった。その90%がナウマンゾウ、10%弱がオオツノジカ、あとは現在も生存するニホンジカ、ヒグマ、ノウサギ等だ。このようにナウマンゾウのみが極端に偏る動物構成は自然状態ではありえず、人類の関与によるところが大きい。

◎キルサイト<狩猟した大型哺乳動物の解体場> キルサイトの条件 1) 動物を追い込みやすい特定の条件を備えているか。2) 動物遺体が自然死ではなく人間の行為が関与したことを示す出土か。3) 動物遺体と狩猟解体用の道具との共存が認められるか。4) 住居跡など集落要素との隔たりがあるか。

◎先生は野尻湖がキルサイトなのか否か、所説を紹介されている。アメリカに500頭のバイソンのキルサイトがある。これも、人間行動が関与したか文化形成プロセスと、自然現象の作用による非文化形成プロセスとが認められている。いずれにしろ異常な数の遺体がある、ヒトに殺され食われたのか、寒さ暑さに耐えきれなかったのか・・・。

◎ナウマンゾウ・オオツノジカ動物群：ナウマンゾウ（現アジアゾウより小さい）・オオツノジカ・トラ・オオカミ・ニホンムカシジカ・イノシシなど中国にいた動物たちが陸橋を渡って、30～40万年前にやってきた。一方、マンモス動物群：マンモス・バイソン・ヘラジカが見られ、シベリア、サハリンを経由してやってきた。2～2.5万年前にこれらの大型獣の大量絶滅が起きている。

◎某学者説：シベリアからベーリング海峡を渡ったモンゴロイドは、カナダに南下、その後、北米、南米へと下り、大型獣を狩りつくすのに1,000年ほどしかかからなかった。

◎某学者説：大型獣の大量虐殺は一部の場所だけで、狩人が大型獣を首尾よく仕留めるのは生涯でも一度程度、語り草に残っているだけだ。

◎某学者説：シベリアでは旧石器人がマンモスの若い個体を集中的に狩猟し、群れの繁殖に歯止めがかかった。

◎某学者説：人類の関与が認められない辺境地域でも、大型獣の絶滅が起きている。

◎三島市に“陥し穴”とみられる土坑群が見つかった。直径・高さが1.5M。発見されただけで60基。3～3.4万年前と測定。鉄製スコップでも簡単に掘れない地層。埋葬の穴ともいわれるが、猟の為の陥し穴だろう。

◎現代美術の解説といい、ヒトの顔が見えない石器時代の話といい、先生方は、想いを、哲学風にお話しなされる、これはこれで大いに楽しい。

ホモ・サピエンスになると「人の死」は尊厳をもって受け入れられるようになった。2.8万年前スギール遺跡：赤色土に包まれ多量のビーズをまとい槍などが副葬されたに對の遺体の墓。日本には墓らしい遺跡はあるが、人骨は出ていない。

ホモ・サピエンスは「死の観念」を創生した。ヒトが「心」を持ったことに由来する。ヒトの認知構造の流動性によって、それまで独立していた、社会的知能<他人と関係し心を読む知能>。博物的知能<暮らしに必要な自然界を理解する知能>。技術的知能<道具を作る使う知能>。3つの知能領域に統合が生じ、言語・宗教・芸術・科学など多様な文化が爆発的に開花した。今の我々は、花開いた大文明の真ただ中、溢れる情報に溺れそうになりながら、自分の知識を矜持しているように見えるが、その実、矜持しているのは、相手の“文明氏”ではないのか。